

とくべつてん 特別展「大集合! 富山の鳥たち」展示解説  
とやま へ ふ  
富山の鳥 — 減った鳥・増えた鳥 —  
たかばたけ 高畑 ありら 晃

1. 多様な富山の鳥

「富山ではミサゴを普通に見ることができますね」、「ムギマキが街中の公園で見られるなんて、すごいです」(図1,2) これは、都会から富山に引っ越してきたバードウォッチャーから実際に聞いた声です。その言葉通り、都会に住む人にとっては、遠くまで出かけないと見ることができないような鳥が、富山ではごく身近に見ることができるのです。

富山県は、富山湾から立山連峰まで標高差3,000mに及ぶ起伏に富んだダイナミックな地形で、植生自然度が全国第3位という豊かな自然に恵まれています。また、本州の日本海側の渡りのルート上に位置しています。そのためコンパクトな県でありながら、これまで350種以上の野鳥が記録されています。

少しがんばれば、5月上旬に立山室堂に行って、特別天然記念物のライチョウと日本固有種のカヤクグリを見てから、富山市の呉羽丘陵に行って渡り途中の夏鳥のさえずりを聞き、その15分後には射水市の海岸で、これまた渡り途中のシギ・チドリの群れを見ることも可能です。こんなことができるのは、富山ならではの魅力です。

富山県でたくさんの種類の鳥を短期間で見るには、公園や海岸で渡り鳥を観察するのがおすすめです。そこで渡りを実感することができる、夏鳥とシギ・チドリの渡りを紹介しましょう。



図1. ミサゴ。

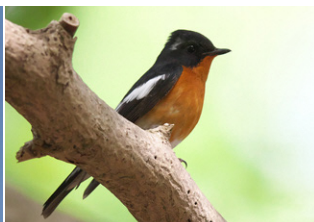


図2. ムギマキ。

1.1. にぎやかな夏鳥の渡り

4月中旬～5月中旬、春の渡りの季節になると、身近な公園で夏鳥の渡りを実感することができます。

富山市の呉羽丘陵や馬場記念公園、滑川市の行田公園、入善町の墓ノ木自然公園などに出かけてみてください。そこでは、これから繁殖のために山や北に向かう、色鮮やかなオオルリやキビタキなどの夏鳥たちが次から次へと羽根を休めていきます(図3,4)。この時期の鳥たちは美しい声でさえずることが多いので、よりいっそうにぎやかに感じます。観察の狙い目は、雨が降った翌日あたりです。鳥たちも悪天候では、羽根を休めていることが多いからです。ただし、渡り途中で疲れて休憩しているのですから、そっと観察しましょう。

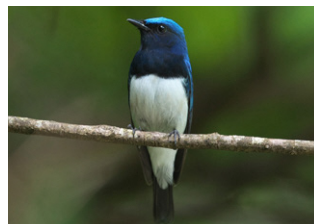


図3. オオルリ。



図4. キビタキ。

1.2. シギ・チドリの渡り

日本より北で繁殖し、日本より南で越冬する鳥を旅鳥と言います。その旅鳥である、シギ・チドリの秋の渡りは意外に早く、7月下旬には南に向かう渡りが始まっています。海岸や水を張った水田に出かけてみましょう。

お盆を過ぎた辺りから、シギ・チドリの渡りはピークを迎え、アオアシシギの「チョーチョーチョー」という特徴ある声を聞けば、「秋の訪れ」を感じることができます。

波打ち際には、せわしなく群れで歩くトウネンや、「ピューイ」とよく鳴くキアシシギをよく見かけます。また、くちばしが下に湾曲したチュウシャクシギ、反対にくちばしが上に反ったソリハシギ、太くて短いキョウジョシギなど、その多様なくちばしを観察するだけでも十分楽しめます。(図5,6)

シギ・チドリの中には、北半球の繁殖地と南半球の越冬地を移動するものもいます。長距離を移

動する彼らにとって、このような中継地はとても重要な場所です。羽根を休め、ゴカイや甲殻類、昆虫類など、多くの餌を食べて次の移動に備えるためだからです。



図5. チュウシャクシギ.



図6. ソリハシシギ.

## 2. 減った鳥

私は富山県で37年間鳥を観察してきましたが、少しずつ鳥の顔ぶれが変化しつつあることを感じます。「鳥たちのにぎやかなコーラスが聞かれなくなった」、「秋になるとすごい数のツグミが渡ってきていたのに、最近はずっかり規模が小さくなった」と言う方もおられます。そこで、顕著に数が減った代表的な鳥を紹介します。

### 2.1. ブッポウソウ

ブッポウソウは、東南アジア等から夏鳥としてやって来て、本州・四国・九州で繁殖します。全身が瑠璃色で光が当たると美しく輝くことから「森の宝石」と呼ばれています。枯れ木や電線から飛び立って、セミやトンボなどを空中で器用にとらえることが特徴の鳥です。富山では立山町ブナ坂や八尾町大長谷、上平村西赤尾などの山間地で繁殖していました。(図7)

ところが、餌となる大型の昆虫が多く生息する広葉樹林の減少や、社寺林周辺の宅地化による



図7. 八尾町で繁殖していたブッポウソウ.

里山環境の消滅等で、近年全国的に激減しています。石川や岐阜、新潟といった周辺の県では繁殖が確認されており、巣箱かけによる保護対策も行われていますが、近年、富山では渡り途中と思われる姿が、時折確認されているに過ぎません。まずは、県内の飛来数や繁殖状況を調査する必要があります。

### 2.2. アカモズ

アカモズはモズの仲間で、世界的に見ても日本とその周辺地域でしか繁殖しない鳥です。県内では、主に渡りの時期に平野部の川原や公園などで見ることができました。(図8) また、1978年～1980年代前半には富山市の馬場記念公園、1992年には射水市堀岡で繁殖した記録があります。

アカモズは全国的に激減しており、2019年の調査では、繁殖しているのは北海道と本州のごく一部に限られ、過去100年間で91%も分布が縮小したと推定されています。近年、富山では観察されておらず、絶滅寸前の状況にあるようです。



図8. 富山市に飛来したアカモズ(1991.5.19).

### 2.3. セッカ

全長13cmのスズメより小さい鳥です。チガヤやスキなどの生える草原や河原、水田などに生息し、昆虫やクモを餌としています。図鑑には、「日本では沖縄諸島から東北地方にかけての各地に分布・繁殖しています」と書いてあります。実際に1980年代くらいまでは、県内の各河川で見られましたが、いつの間にか近年はほとんど観察できなくなりました。繁殖期には「ヒッ、ヒッ、ヒッ」の後に、「チャッ、チャッ、チャッ」と下降しながら鳴きます。あの独

とく  
特のさえずり飛翔の声を聞かれなくなったことは、  
とても残念です。

この他にもイヌワシやヨシゴイ、タマシギなど、  
とやま  
富山から姿を消すのではないかと危惧される鳥  
が多くいます。当たり前のように見かけていた鳥  
が、いつの間にか見られなくなる可能性のあるの  
です。わたしたち人間の活動が鳥たちの生息に様々  
な影響を及ぼしている可能性が高く、詳しい生息  
調査や地球規模の環境保全が求められています。

### 3. 増えた鳥

逆<sup>ぎやく</sup>に数を増やしてきた鳥もいます。富山では、夏  
に南から渡ってくる夏鳥よりも、越冬のために北か  
ら飛来する冬鳥の方が多です。それに個体数の  
増加<sup>こたいすう</sup>が加わり、近年冬鳥の増加が目立つようになっ  
てきました。その代表的な3種を紹介します。

#### 3.1. ハクチョウ

とやま  
富山で越冬するハクチョウは、オオハクチョウと  
コハクチョウの2種類です。名前のとおり、オオハ  
クチョウは大きくて、コハクチョウは一回り小さいの  
ですが、確実に識別するには、くちばしの黄色の  
部分を見ると分かりやすいです。くちばしの黄色い  
部分の先端側が尖っているのがオオハクチョウで、  
丸みがあるのがコハクチョウです(図9)。また、コ  
ハクチョウは首が短く見えます。

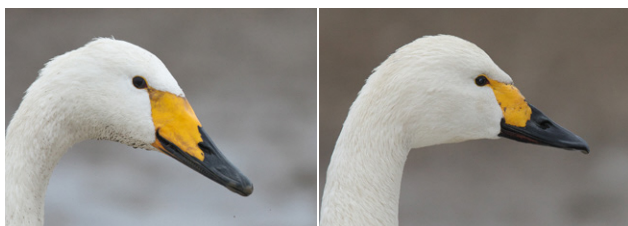


図9. オオハクチョウ(左)とコハクチョウ(右)の  
くちばしの違い。

とやま  
富山でハクチョウといえば、富山市池多にある  
たじり  
田尻池のオオハクチョウが有名です。1970年代の  
オオハクチョウの数は十数羽程度でしたが1990年  
代になると100羽を超えました。また、富山市野  
なか  
中では2002年からコハクチョウに給餌をし始め  
ると、そこで越冬する数が増え始め、一時は500  
羽を越えました。野中で給餌をやめてからは八尾

まち  
町・婦中町に場所を変え、そこで多くのハクチョウ  
が越冬するようになりました。日本野鳥の会富山が、  
2023年1月9日に行ったカウントによると、八尾  
まち  
町・婦中町一帯にいるハクチョウは、オオハクチョ  
ウが233羽、コハクチョウが551羽いました。こ  
の他にも射水市や氷見市などでも越冬しています。

ハクチョウが増えているのは、富山に限ったこと  
ではなく、日本全体の傾向です。その理由の一つ  
として、各地で保護区を設定するなど、ハクチョウ  
が安全にすごせる場所を確保したことや、給餌をす  
る所が多くなったことがあげられます。

一方で、地球の温暖化にともない、繁殖地であ  
るユーラシア大陸北部で餌になる植物の生育が活  
発になり、個体数が増加したことが考えられます。  
また、ハクチョウたちが、湖沼に生えている水草を  
餌にするだけでなく、農耕地で稲の落ち穂や二番  
穂、田んぼに生える雑草などを餌として食べるよう  
になったことがあげられます。ハクチョウの行動を  
観察していると、毎朝、人や外敵が簡単に近づけ  
ないねぐらから飛び立ち、田んぼで餌を採る日々  
の生活が見られます(図10)。



図10. コハクチョウのねぐら。

#### 3.2. ミヤマガラス

ミヤマガラスは、身近に見かけるハシブトガラスや  
ハシボソガラスと比べて一回り小さく、くちばしが細  
くて尖っており、成鳥ではくちばしの根元が白く見  
えるのが特徴のカラスで、冬鳥として渡ってきます。  
ミヤマガラスの分布は、1970年代には九州地方と  
山口県、島根県でしたが、1980年代の後半になる  
と、日本海側では西から東に分布をどんどん広げ  
ていきました。富山では、1987年に初めて確認さ

れ、その後毎年大きな群れが確認されるようになりました。はじめは、富山市や射水市の郊外に限られていたのですが、最近では県内のあちこちで見られるようになってきました。ミヤマガラスは、たいていは広い田んぼに群れで下りて、落ち穂や昆虫などを餌として採っています(図11)。

ミヤマガラスが増えた原因としては、繁殖地である極東地域で農薬による環境汚染が改善され、ミヤマガラス全体の個体数が増加したことが考えられます。また、稲の刈り取り時に使用するコンバインの普及によって、落ち穂が増加したことによって餌が増えたこともあります。

さらに、積雪量の減少も日本海側で分布を広げてきた理由として考えられます。富山で初めて大きな群れが見られたのは1989年以降で、これは積雪量が減ってきた頃と重なっています。



図11. 田んぼで餌を採るミヤマガラス。

### 3.2. オオバン

オオバンは、体全体が真っ黒で、白い額とくちばしがトレードマークの識別しやすい水鳥です(図12)。一見、カモに似ていますが、カモの仲間ではなく、ツルの仲間属しています。水面では首を前後に動かして泳ぎ、「キョン、キョン」と甲高い声で鳴くので、カモの群れの中にも紛れていたり、ヨシの中に隠れていたりしてもその存在に気がきます。オオバンは、県内では少数が繁殖しますが、多くは冬鳥としてやってきます。1980年発行の「富山県の鳥獣」には、「少数のものが渡来するにすぎない」と書いてあります、しかし、近年、河川や街中の公園の池をはじめ、用水や漁港など、いたる所でオオバンが見られるようになりました。場所によ

ては、50～100羽くらいのオオバンだけの群れも見られます。

オオバンが増加した理由として、ロシア、モンゴルから中国北部にかけての繁殖地で、繁殖成功率が高まって個体数が増えたことが考えられます。また、オオバンがそれまでの湖沼から他の場所へどんどん拡大したことが要因として考えられます。

今後もオオバンの生息地が拡大することが予想されます。身近な水辺にいるオオバンに注目してください。



図12. オオバン。

### 4. おわりに

以上、富山で減った鳥と増えた鳥を紹介してきましたが、ツリスガラのように、1980年代後半に富山で数を増やした時期がありましたが、近年になってその姿が見られなくなった鳥もいます。

また、数が増えたといって手放しで喜ぶことはできません。増えた要因として、急激な温暖化や生息地の環境悪化などの人為的影響が考えられ、変化する環境に生活スタイルを適応させることができた種だけが数を増やしていると考えられます。特定の種が増えることによって生態系のバランスが崩れたり、人との間で軋轢が生じたりすることも危惧されます。鳥の顔ぶれの変化については、今後も様子を注意深く見守っていく必要があります。

